

研究結果報告書

日本語学習者によるパーフェクトの「テイル」の習得における母語の影響
－日本語学習者のコーパスと日本語母語話者のコーパスの比較から－

所属： 慈濟大學 東方語文學系
役職： 助理教授
氏名： 簡 卉雯

テイルの「パーフェクト」用法は、基準となる時点よりも前に実現した出来事が、引き続き基準時点まで効力を持ち、係わりがあることを表している（工藤1995）。第2言語としてのテイルの「パーフェクト」用法の習得について、テイルの諸用法の中でも、最も習得しにくい用法であることが報告されている（三村1999；Ishida2004；許2005；菅谷2005）。しかし、習得が困難になる要因については、未だ明らかにされていない部分が多い。

本研究はロジスティック回帰分析とコレスポネンシ分析に基づき、「KYコーパス」と「上村コーパス」を用い、「パーフェクト」のテイルの習得の難易を左右すると考えられる4つの要因、①「パーフェクト」意味の種類（完了／効力持続／記録／反事実）、②動詞の種類（動作動詞／変化動詞／内的情態動詞）、③母語（英語／韓国語／中国語）、④日本語レベルの4つに注目し、これらの要因が母語の違いにより、テイルの習得にどの程度影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。

分析の結果、まず、日本語母語話者には、「効力持続」が多く用いられている一方で、日本語学習者には「完了」が比較的高い率で使用されていることが判明した。次に、学習者の母語が異なるにも係わらず、「パーフェクト」の各意味の習得は難しい順に、「反事実」、「記録」、「効力持続」、「完了」であることが観察された。更には、結びつく動詞の種類が習熟度と母語の違いに応じてどのように変わるかについて分析した結果、中国語話者は英語と韓国語話者に比べ、上級において比較的「完了」と「変化動詞」を多用している傾向が明らかになった。一方、英語と韓国語話者は中国語話者に比べ、比較的「効力持続」を多用しており、特に超級の場合は顕著であった。

以上のことから、「パーフェクト」のテイルの習得において、習得順序は、母語の違いに係わらず学習者に共通する普遍性があり、習得過程は母語により異なり、個別性があることが明らかになったのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

簡弁雯 (2013. 10. 13) 「第2言語としての「ている」のパーフェクト用法の習得—ロジスティック回帰分析を用いて—」 『日本語教育学会2013年度秋季大会発表予稿集』, 260-265. (於日本・関西外国語大学)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

簡弁雯(2014年出版予定) 『日本語「ている」の習得研究：パーフェクト用法を対象に』